とある幼女の最強恐竜（一旦完結）

カリーシュ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

コスタリカに浮かぶ、とある島―

その後、大惨事の現場となる夢のテーマパーク―『ジュラシックワールド』が開園する場所で、

数多の恐竜のＤＮＡを組み込んだ怪物

『インドミナスレックス』が二頭、誕生した。

しかし一頭は、無惨にも姉妹に殺され、成長したのは一頭だけだった。

これは、ｉｆの話―

もしも―この殺された一頭が、

死んだとされ、死体が破棄された幼体が、実は生きていて―

その悲劇を知った何者かによって、異世界にて生きていたら―

……これは、そんな幼体のハチャメチャな冒険記。

―――――――――――――

どうも、カリーシュです。

今回は、テレビでの『ジュラシックワールド』放送記念として、こ

の話を投稿しました。

注意点は、

・即席で作った設定。

・駄文。

・ひたすらふざけ続ける。

・短編。　続けるかどうかは未定。

以上のモノがオッケーという方は―

ゆっくりしていってね！

目次

1話 …… 1
2話 …… 11
3話 …… 22
4話 …… 35
第5話 …… 43
第6話 …… 54
第7話 …… 64
第8話 …… 70
第9話 …… 78
エピローグ …… 87

1話

side??

……あれ、ここはどこだろう……？

「―如何だ?!」

「―駄目だな。　傷が深過ぎる」

……たしか、おねえちゃんとごはんのとりあいになって……

「―破棄だと!?　コイツにどれだけのコストが掛かったと」

「まあまあ落ち着け。　どうせコイツらは二頭いるんだ、片方が死んでも問題無いだろう」

……さっきから、うるさいなぁ……

でもちからがはいらない……それに、なんだかねむくなって……

「―チッ！　ならせめて解剖なりなんなりして、研究に役立てろ！

パークの方でも、コイツは『期待の星』だからな！　バックレるなよ、このヘッポコ!!」

カッ、カッ、カッ、カッ、カッ、―

「……メスの刃が折れる相手を、どうやってバラせと？

ったく、ハイブリットだか何だか知らねえけど、胸糞悪くなるモン作りやがって……

―いっそ棄てるか。　けど焼却処分はアシがつくし……埋める

か。
後は野となれ花となれ、てな」

うにゅ……いいかんじにゆれて……
……おやすみなしゃい……

「―あれ？　ついさっきまでちゃんと持ってたよな？
……どっかに落としたか？　ヤベェ、バレたらクビだ！　物理的に首がトンじまう!?
ティラノのエサはイヤだぁぁぁぁぁぁぁあ!!」
「……おい、何をしている？」
「」／（^ ρ^）／人生オワタ

―とある日―具体的には、２０１７年８月５日の早朝
―八坂家

ｓｉｄｅ真尋

「……ふぁぁ―昨日夜更かしし過ぎたな」
久し振りに居候邪神ｓがアニメか怪しい謎放送以外の番組を見てると思ってみたら、まさかのパニック映画だったからな……
しかもあの後、「過去編が気になりますね！　ね!!　ね!!!」と押し切られ、第１作から３作までぶっ通し……

「…日曜だし、母さんもいるし……
もう一眠りして大丈夫だよな」
「そうです。　レッツ二度寝タイム！」
取り敢えず流れ作業でベットの中に這い寄る混沌をフォークで刺して窓から捨て「ひでぶ!?」、枕に頭を沈める。
ついでに湯たんぽみたいに暖かいモノがあったので、少しばかり冷えた身体を温めｒ―

「……湯たんぽ？」
夏だぞ？　蒸し暑い夏場の布団の中に湯たんぽとか、病人相手じゃなければ拷問だ。

「さっさと叩き出し―いやまずは様子をみよう」
布団を捲ったら神話生物とコンニチハはＳＡＮ値がヤバい。
タダでさえここ最近は色々あって、精神的にキテるのに。

まず大きさ。
結構小さい。　多少無茶をすれば片手で支えきれるだろうサイズだ。
次に触感。
ザラザラしてるが、全体的にヌメッとしている。
最後にシルエット。
……シャンタッ君じゃないことだけは確かだな。
翼無いし。　棘生えてるし。

「……しょうがない。　クー子でも呼ぶか」
夜通しゲームがデフォルトのあいつなら起きてるだろうし。　それに、部屋に呼んで１番安全なのがクー子だ。
……なんで同性のハス太よりも安全なんだろう。　涙が出て来る。
思わず涙が出てしまったようで、視界が歪み、布団に赤いシミが広がったように見えｔ―
いやどんな幻覚やねん。
「……シミーーー!?」
慌てて捲る。
血塗れの生命体Ｘ（ただし虫の息）とコンニチハ。
「」
「ぎゃぁぁぁぁ?!　に、にゃ、ニャル子ぉぉぉぉぉぉ!!　これはど

ういうことだぁぁぁぁぁぁぁ!?」

寝起きドッキリ？　寝起きドッキリなのか!?
悪質過ぎるだろぉぉぉぉぉぉ!!
そして伏線は何だったんだぁぁぁぁぁぁぁ!?

「……少年、うるさ―
……それ、どっちの破瓜の血？　答えによっては―」
「オイバカクロスファイアシークエンスは辞めろ！　ちょっと手伝え!!」
慌てて跳ね起き、布団を蹴って退かす。
そこまでやればベットの上の惨状が見えたようで、クー子の眠そうな目が見開かれる。

「……少年が産んだ？」
「だから僕は男だぁぁぁぁぁ!!」
「……冗談」

火炎が引っ込み、クー子が例の生命体に触る。

「……少年、ハス太を呼んできて」
「何か分かったのか?!」
「……逆。　種族も、何で血塗れなのかも分からない。　でもハス太なら」
「元セラエノ図書館員―成る程！
すぐに連れて来る！」

部屋を飛び出て、奥の物置―今は連中の根城と化した空間―のドアノブを金髪の顔のマークに合わせて開ける。

「Ｚｚｚ……駄目だよまひろくん、そんな、ニャル子ちゃんたちの目

の前でなんて……」
閉める。

深呼吸。　心を落ち着ける。
「ｔａｋｅ　ｔｗｏ」
ガチャっ！
「Ｚｚｚ……駄目だよまひ「言わせるかぁぁぁぁぁぁぁ!!　起きろハス太!!　緊急事態だ!!」
んんん……ふぇ？」
「そうですよハス太！　せっかく真尋さんが起こしに来てくれたんですから3数える内に起きなさい！」
「じゃあ頼んでやるから星に帰れ」
「ハス太、永遠にゆっくりしていていいですよ」
「そう言いながらバールを振り被るな！」
「フォークっ!?」

いつの間にやら復活していたニャル子（気絶中）と、まだ半分寝ているハス太を強引に引き連れて部屋に戻る。

流石に状況が状況な所為か、クー子は特にふざけたりせず、傷口を低温で焼いて止血を試していた。
「……少年、遅かった」
「悪い、色々あった」
「……便利な言葉。　ハス太、後は任せる」
「ふぇ？　ふぇ?!　ふぇ!?
何このいきもの!?」
おっかなびっくりといった具合に謎生命体に触る。
「……少年、一つ分かった。

あの生き物、同じくらいのサイズの生き物に襲われてああなったと思う。　多分、犯人は同族」
「同族？」
「……ん。　牙とか、爪の大きさとかと、傷の大きさが大体一緒」
「…よく分かったな」
「……少年、褒めてくれてもいい」
「あー、後でな」
考えてみれば、２人揃って手が真っ赤だ。　この手で髪なんか触った日には洗うのが大変だろう。
……ハス太のベットシートはちゃんと洗っておこう。

「ふぇぇぇぇ……」
「どうだ、何か分かったか？」
「全然……見た事も聞いた事もないし、種族が分からないから薬も使えないし……」
「オイ待て、ハストゥール製薬の薬に種族単位での分別があったのか？」
「……ひ、人と邪神はあれるぎーとかが一緒なんだよ」

そーなのかー。　なら目を合わせて喋ろうな？

「―何やってるんですか。
構わずバーッと殺っちゃいましょう、バーッと!!」
「おいニャル子漢字!?!?」
いつの間にか復活していたニャル子が、懐から取り出した液体を謎生命体にぶっかける。
「何ヤッてんだこのバカァァァァァァ!?!?!」
「ご心配無く！　今のは『げ〇きのかたまり』をすり潰した粉を溶かしたモノで」

「ポケモンじゃねぇんだからんな怪しいモン振り回してるんじゃねぇぇぇぇぇぇぇ!!　それに本当に効果があるなら夜鬼にボコられたシャンタッ君に使ってやれよ!?」
「この薬はルルイエの一件の後、地球原産の素材で作ったからあの時は無かったんです！」
「材料言ってみ」
「苦虫、アオキノコ、ハチミツ、マンドラゴラ」
「ゲームが違う！　それ『げん〇のかたまり』じゃ無くて『秘薬』じゃん!?!?」
「……ニャル子、それよりも活力剤からのケルビの角の方がいい」
「いにしえの秘薬にすればいいってモンじゃ無いだろ!?!?」
「あ！　めをさましたよ！」
「効いたよ!?　効いちゃったよオイ!?!?」
　体躯の割に円らな瞳が見え、弱々しく「きぃー」と鳴いている。
「あぁもう！　ニャル子、脱衣所からタオル取って来い。　ハス太とク一子はまず手洗って着替えたらｉＡｉＡＰａｄで出来るだけ調べておいてくれ」
「……分かった」
「う、うん！」
「邪神使いが荒いが人ですなー真尋さんｈ
「今すぐ持って来いでなきゃフォークで生皮剥いでタオル代わりにするぞ」
生体時間加速（クロックアップ）して持って来ました」
　顔を青くして震えながらタオルを差し出して来た。
　それを取って、血を拭っていく事数分―

なんか見た事ある奴になった。

具体的には、昨日の映画ラッシュの最初に見た作品で、1番大暴れしていた『イ』から始まる奴。

「お、おい、ニャル子、これ……」

「何ですか？　言っておきますけど私は別に男子のお宝など……」

縦に幅の広い顔。
紅い瞳。
背骨に沿って生えた棘。
緩くカーブした鉤爪。
白いウロコ状の表皮。

うん間違えない。

「―ニャル子ちゃん、変なニュースが……」

「……今朝、そこそこの規模の次元振動があったらしい。　異世界からの迷子の可能性が……」

「「「……恐竜?!　しかもインドミナスレックス!?!?」」」

で、即争奪戦となった。

「か、カワイイですね！　触らせグウウェイ!?」

「まだ弱ってるから駄目だようわぁ!?」

「……手当ての語源は、手の緩い温度が自然治癒に1番良いとされていたから。　だから温められる私が触るべきメラっ!?」

「邪魔しないで下さいクー子！」
「―お前らが1番邪魔だぁぁぁぁぁ!!」
枕元のフォークを全弾飛ばす。
「「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?!?!?!?」」
「」
「真尋くーん、お湯でふやかしたヤギ肉でいいかしら？」
「準備良すぎ!?」

2話

side真尋

「―で、さっきポロッと言ってた『次元振動』って何だよ」

場所は変わってリビング。

インドミナス（仮定）はチーム小動物（ハス太とシャンタッ君）に任せ、こちらではバカ（バカ）2人がさっき漏らした新設定を聞き出す。

「……少年、ルビと本文が一緒」

「平然と地の文にツッコんでんじゃねぇよメタいよ。

で、結局なんだよ30字で説明しろ」

「いやぁ、流石に30字じゃぁ……」

「はぁ……分かった。　じゃあ90字な」

「次元振動というのは、ハッキリ言って私たちにも正体が掴めておらず、分かっていることは、それが発生すると異次元の存在や世界―

創作物だったり自分自身だったり―が現れるという事だけです」

「わざわざジャストにしなくていい。

……ていう事は何だ？　ゲームや映画の世界は別世界で実在するっていう事か？」

「そうなりますね。

『神様に合わないで転生してソッコーで死んだｗｗ』とか、『ドッペルゲンガー』とか、『幻想入り』とか呼ばれるモノの原因とも言われていますよ」

「マジかよ」

……でも考えてみれば、こいつら（クトゥルー邪神群）も創作神話だと思ってたんだよな。

それに比べれば、最初から潜んでいたか、後から異世界のスキマか

ら来たかの差だしな。

「……あれが『本物』だとしてー
惑星保護機構（お前らの職場）はどう動くんだ？」
「ええと―監視、害になるようなら即、処分ですね」
「怖っ!?」
「……多分、処分は無い。　映画のあの１０メートル強のサイズならまだしも、あの状態なら危険は無いー」

「みぃー!?　みぃー!?!?」
「ぐるるるる」
「ちょっ?!　シャンタッ君はご飯じゃないよ!?!?」

「……危険が、何だって？」
「……あれは多分幼体。　成長したら大変」
「ならさっさと処分するとしましょう。　クー子、非常時用に支給されたのがあったでしょう。　出しなさい」
「……ニャル子のは？」
「売りました」
　クー子がスカートの内側からビンに入った飴状の物体を取り出す―って、
「お、おい、何やってー」
「はい、アーン」
「聞けよ人の話!?」
　ツッコんでる間にインドミナス（仮定）が、飴状の物体を一粒どころか何粒も食べる。
「……なにって、このタイミングでは毒薬以外にありえない」
「……だよな」

情に負けて育てれば、間違いなく、手に負えなくなる。
それは分かってるのだが……目の前で命が消えていく事に耐えられず、背を向ける。

「……少年、」
「分かってる。　誰も悪く無い。
……行こう、ハス太」
「ふぇ？」
状況が分かって無いらしいハス太とシャンタッ君を連れてリビングを出る。
どんな毒薬なのか分からない以上、ショッキングな映像になるかもしれないのだ。
映画の人死にのシーンにですら毎回驚いていたハス太が見るには、早過ぎる。
「……結局、何も出来なかった……」

「……で、どうしてこうなった？　３行で答えろ」

「クー子が間違えて、通販で買った薬を渡した。
薬の中身は前にシャンタッ君が飲んだ擬人化薬の改良版。
結果こうなりました。
おのれインジェン社!!」
「インジェン社は関係無いだろうが!!」
「あべしっ!?」
状況説明。

Tシャツ一枚の銀髪幼女がソファーで焼いた肉にかぶりついてる。

いやーほんとおいしそうにたべるねーあはははは（↑現実逃避）
「かいりょうばん？」
「ええ。　なんでも、シャンタッ君が食べたヤツにハチミツを練り込んだら出来たようで。　ちゃんと人語を話せるようになったとか」
「……主成分がドキドキノコだからって、安易な発想。　レビューでも批判的なコメントが多かった」
「ならなんで買ったんだよ!?」
「……チャレンジ精神？」
「僕に聞くな!!」
「はうっ!?」
眉間にフォークを突き刺してやる。
……まあ、結果としては、一つの命が救われたからいいとして。
「……もういい。　それよりもあいつをどうするか決めないと」
振り向く。
銀髪幼女が土下座状態で震えながら焼けた肉を差し出していた。
「……ゑ？　ちょ、なんで？」
「む、むれのおさが、い、いちばんさいしょに、ご、ごはんをたべるから」

「群って……ラプトルの遺伝子か。
て言うかなんで僕？」
「お、おさが、い、いちばんつよい、から」
「ｏｈ……」
あれか？　フォークでドーンのインパクトが強過ぎたのか？
試しにフォークをポッケから取り出す。
「ピィィっ！」
震えが一段と強くなる。

フォークをしまう。
震えが少し収まる。
フォークを取り出す。
震える。
フォークをしまう。
震えが収まる。
フォークを取り出して金属摩擦音を立てる。
失神した。
「もう辞めてあげてぇ！
その子のライフはもうゼロです!!」
「うお!?」
ニャル子が腕を広げて立ち塞がる。
……言われてみれば、なんて事をやっていたんだ僕は。
わざと幼女を怯えさせるなんて、最低ｎ
「私たちの愛の結晶をっ!!　虐めるだなんてっ!!」
「さっきまで毒とか処分とか物騒な事をやってた奴が言うな!!」
ニャル子の目玉にフォークでドーン。
……完全に怯えた目で見られた。
なんだろう、この罪悪感。

この後、メチャクチャ必死に誤解を解こうとして失敗した。

取り敢えず「おさ」は止めてもらうことには成功したが。

「―そういえば、コイツが本物の『インドミナスレックス』だとして、パークは大丈夫なのか？　モグモグ」
「本人に聞いてみればいいじゃないですか。　どうせ私達には分かりませんし。　ガツガツ」
「それもそうだな。
……なぁ、どこから来たんだ？　ムシャムシャ」
「んぐんぐ……わからない。
わたし、おねえちゃんとごはんのとりあいになって、けんかして、きがついたらここにいた」
「お姉ちゃん……インドミナスは二頭いたのか？　バクバク」
「……ゴクゴク、そう言えば劇中で、獰猛さの説明で『二頭の内一頭がもう片方を殺した』って言ってた気がする」
「じゃあストーリーは繋がるのか。
……て言う事は、映画のアレとは別個体なのか。　モグモグ」
真っ昼間からの焼肉パーティーをしながら話し合う。
なにせこの幼女、最低でも僕が何か食べてないと何も口にせず、なのにお腹を鳴らしながら涙目で見上げてくるのだ。
どうして無下に出来よう。
誰だってそーする。
真尋だってそーする。

「チッ……まさか真尋さんがロリコンだったとは」
「フォーク封印解除しようか？　バクバク」
「なんでもありません」
「……少年。　そろそろ食べるのを止めてもいいと思う」
「ん？　何で―まぁあれだけ食べればそうだよな」

草食恐竜の遺伝子の効果もあってか、米や野菜までバクバク食べまくった結果、どうやら眠たくなってきたようだ。

「悪い、クー子、運んでやってくれないか？　ニャル子だとコッソリ亡き者にとか考えそうだし、ハス太はとっくにダウンしてるし」
「信用!?」
「……おさ、分かった」
「だから長は辞めい」
「スルー!?」
「今なら視線を気にせずフォークを投げれるけど？」
「ゴメンナサイ、オッシャルトオリデス」
生肉はタッパに入れ、冷凍庫に放り込む。
余り物もラップで包んで冷蔵庫に放り込み、焼いた肉はダウンから復帰したシャンタッ君に幾らかあげ、残りをニャル子と2人で根性で胃に詰める。
ちなみに母さんは買い物で不在だ。
「うぷ……食べ過ぎた」
「休んでる暇は無いです。　今後どう対処するか決めなくては……おうふ」
「もどすなよ？　絶対もどすなよ!?　フリじゃないからな!?」
「ゲロインになるつもりはないので……で、対処ですが、」
「あれ、お前らのことだから、強引に飼うとか言い出しそうなのに」
「そうしたいのは山々ですが……
やはり成長後を考えると。
私の契約カプセルは5メートル程度が最大収納限界ですし、メタ

フィールドの拡張限界も精々３０㎡ですし。
それに、劇中の時点での戦闘力が事実なら、我々３人の戦闘力では搦め手でも使わないととてもとても」
「ウソだろ、そんなバグった奴なのかよ……戦闘力？」
「宇宙インターネットで、映画の登場キャラの戦闘力を数値化しまくってる物好きな連中がいましてね。
ゴジラ対ガメラとか、夢の対決を全部数値で処理したとドリーム（夢）ブレイカー（破壊者）とか言われてネットでは叩かれてるんですが、今回は助かりました」
「……まじかよ」
ソファーでクー子共々爆睡している銀髪を見る。
「……ドリームランド―は、本体ごとあっちに行く訳じゃないから無理か」
映画の中での暴れっぷり―
人の裏を平然とかき、罠を仕掛け、組み合わされた遺伝子の元になった生物の能力を的確に使う程の知能を持ちながら、殺戮を楽しむ本能を持つ。
他の生命体に会わずに成長した結果として、自分の立ち位置を探っていたとも言われていたけど……
あの脅威は、本物だ。
……助ける事は、出来ないのか？
「……ダメだ、頭がモヤモヤする。
僕も一眠りしよう」
「そうですか。　では一緒のベットで
「却下。　熟睡するつもりは無いし、椅子（ここ）でいい」
身体を痛めちゃいますよ!?」

「心が痛むよりマシだ。
じゃあ、みょんなことはするなよ？」
そのまま背もたれに体重を預けて目を瞑る。
今朝の睡眠不足もあってか、すぐに睡魔が―

「―う……ん？」
なにやら妙に暑い気が―

「真尋さん！　やっと起きましたか!?」
「うん……なぁ!?!?」
目を覚まして真っ先に目に映ったのは、特撮で出てきそうな、真っ黒な衣装。
ニャル子のフルフォースフォーム。
「おまっ、なんでそんな格好してるんだよ!?」
「敵襲です！　あの子が狙われました!!」
「はぁ!?」
慌ててリビングを見ると―

本気モードのクー子とハス太が、黒フードを被った奴と対峙していた。
その黒フードが右腕で抱えているのは、幼女化したインドミナスレックス。

左手には、拳銃。

「おやおや、やっとお目覚めか。
随分グッスリと寝てたねぇ」
「その声……女だからって油断すると思うなよ!!」
ノーモーションでフォークを投げつけ―
「真尋さん、危ない!!」

ギィンッ!!

「……は?」
フォークが、弾き返された。

「あの敵、こっちの遠距離攻撃を、全部ああやって跳ね返してくるんですよ」
「宇宙ＣＱＣは?」
「グレネード型のジャマーを放り込まれました!」

敵の足元を見ると、等間隔に引かれた横線の部分が点滅している、缶のような物体が転がっていた。

「くっ―」
「八坂真尋……いい殺気だ。
やっぱり、私に脅威を感じさせてくれるのは、アンタみたいな奴だけらしいねぇ。　クッケケケケケケケ!!」
「?　どう言う意味だ!?」
「さぁ?
さて、さぁて―
―また会おう!!」

バチンッ！

「「「!?!?」」」

黒フードが、その場で1回転したかと思うと―

そのまま消えた。

3話

ｓｉｄｅ真尋

「……ダメ。　全然足取りが掴めなかったって」
「こっちも、しはんされてる宇宙ＣＱＣジャマーだったよ」
「むむむ……想像以上に手詰まりですね」
「マジか、お前らでもかよ…」

インドミナスを連れ去られた後―
クー子は惑星保護機構に犯人を聞き、
ハス太は件の手榴弾を調べたが、手掛かりは無かった。

「本当ですか、クー子？　ちゃんと調べたんでしょうね？」
「……入星記録がある邪神全員の移動ログを確認してもらった。
引っかからなかったって事は、不法入星者か―
アレも次元振動で迷い込んだか」
「でも、僕の名前知ってたんだぞ。
その説明はどうなる？」
「むぅ……問題はそこなんですよねぇ……」

「……でも、その逆ならあった」

「「―逆？」」
シャンタッ君も首を傾げる。
逆って、何が逆なんだ？
「……宇宙歴最大の戦死者を出した、『デストロイヤー戦争』」
「ウッソ、アレって伝説じゃ無かったんですか!?」
ニャル子がアホ毛を真上にピンと立てながら驚く。
「おい、なんだそのふざけた名前の戦争は？」

「……次元振動が、異世界へのゲートだと分かった一件。
文字通り、『デストロイヤー』が現れた」
「いやだからなんだよそれ？」

「……スターウォーズの、戦艦」

「……は？」
「つまり、想像上の存在が実在して、襲い掛かってきたって言う戦争なんですよ。
敵の規模こそデストロイヤー（戦艦）1隻にソコソコの数のタイファイターのみでしたが、なにしろ相手が相手でして……
兵装見たさに自滅しながら接近する奴、自ら捕虜になりに行く奴、ベイダーに会ってくると逝った奴。
最終的には、ヨグソトス率いる、原典で言う『外なる神』達がチリ一つ残さず殲滅した所為で証拠が残らず、伝説扱いされてるんです」
「
つまりアレか？
こっちが一方的に向こうを知ってた例があるから、その逆もあるってか？
「……そういう意味では、インドミナスレックスにも同じことが言える」
「……映画か」
……この状況—何気に今までで1番ピンチじゃないか？

今までは、結局のところニャル子達のチートっぷりでゴリ押し出来たが、今度の相手は、その裏をかいてくるのだ。
「―取り返せ無い、のか……？」

「―えっと、ちょっといい？
さっきのしゅりゅうだん、分解したら、こんなのが出てきたんだけど……」
そう言いながらハス太が渡してきたのは、一枚のメモ用紙。
「ん？　……なんだこれ？　座標、か―」

メモには、「南緯４７．９　西経１２６．４３」とだけあった。

……またあそこか。

「―ニャル子。　どうやら向こうはこっちを呼んでるみたいだな」
「は……こ、この座標は!?」
「……間違いない。
―ルルイエ」
メモを見せただけで、察したようだ。
じゃあ、―出発だ。

―太平洋　海底　ルルイエ付近
何時ぞやと同じ様にネフレン＝カーでルルイエに向かう。
ルーヒーの時とは違い、深き者ども達の迎撃こそないが―
アレ単騎での実力が桁違いだ。
目的はどうせくだらないだろうから考えないようにして、相手の戦力を測る。
クー子の予想が正しければ、相手はこちらの手札を全て知っている可能性がある。
しかも人質（インドミナス）というオマケまであるのだ。
悲観するなという方が難しいワケで―

「―さん。　真尋さん！」
「うお!?　ニャル子か、なんだよ？」
「だから、そんなに深く考えなくても良いですって。　きっとなんとかなりますよ！」
「……それもそうだな」
―いつも通り、こいつらの理不尽過ぎる暴力が相手を半殺しにして解決する。
きっと、大丈夫だ。

「―ところで真尋さん。　この戦いが終わったら結婚してくれませんか？」
「なぜ今死亡フラグを立てた!?　」

―ルルイエ
「……なぁ、ニャル子。
確かルルイエって遊園地だよな？」
「……ええ」
「……じゃあ、あそこに見えるデカイビーカーの中身はなんだろうな？」
「……新しいアトラクション用の怪獣ですかね？」
「アハハハハハハハハハハ」
「……少年、ニャル子。　現実を見よう」
「お前には言われたくねぇ！」

何事もなくルルイエに侵入し、真っ先に目に入った物。
シロナガスクジラが入りそうなくらいデカイビーカーに入った、モノスゴク見覚えのある白くてデカイトカゲらしきモノ。

「―随分と遅かったねぇ。　もう私の用事の９割は終わったよ」
ビーカーの陰から現れる黒フード。
「！　見つけましたよ下手人！
さあ、半殺しにされてさっき攫った子を返すか、全殺しにされて返

すか、選びなさい！」
「勝つ前提かい？
クッケケケケケケケ!!」
黒フードはひとしきり嗤ったあと、無造作にビーカーを引きずり倒した。
「ほらよ。　返す」
「？　私は、さっき攫った子と―」
「ああ、言い忘れてたよ。

―そのビーカーの中身、成長を異常促進させるんだ。　タダでさえ成長の早いインドミナスレックスがンなモンに浸かってたら……
後は分かるな？」
「「「ゑ……
えええええええ!?!?!!!!
こ、こいつ、ざっと１０メートル弱はあるぞ!?
「どうだよ？」
「……ものすごく……おおきいです」
「だろ？　コピーするのに最低限必要なサイズにするのは大変だったんだぞ、オイ」
「―まて、コピー？」

さらっと妙な単語が奴の台詞に紛れた。
コピー？　クローンでも作って売りさばく気なのか？
「クケケ……
私達に勝ったら、教えてやるよ」
「達？　共犯者がいるのか？」

「あぁ。　とっておきのな。

—だろう、インドミナス・レックス」
「「「「!?!?」」」」

黄色の瞳が開かれる。
地響きを起こしながら、白く、堅い巨体が立ち上がる。
生え揃った爪と牙が顔を覗かせ、明確な死のイメージを敵対者に植え付ける。

「急激な成長に中枢神経が持たなくてな。　目に映るモン全部敵だと思ってるから、正確には共犯者じゃねえな。　唯のバケモンだ、三つ巴の戦いだ」
「おいおい……
おいおいおいおいおい!?!
自分でも制御出来なくなるって分かってやったのかよ!?」
「制御……?
クッケケケケケケケ、クーっケケケケケケケケケケケ!!

—制御?
インドミナス・レックス(制御不能な獰猛なる王)を制御!?
出来るわけねえだろうが!!
—あァおかしい!　イィギャグセンしてるよ、ヤッベェ、笑いが止

まんねェ。
ついでにテメェじゃァ私も止められねェなァニャル子ォ!!」

ガキンッ！
ニャル子が振り下ろしたバールを、腕一本で防ぐ。

「!?　気が付きましたか!?」
「不意打ちくらいしか私を斃す手はねェからなァ。
モチロン対策はバッチリに決まってんだろうがよォ！」
そのままバールがニャル子ごと吹っ飛ばされる。
バールは折れ、只の鉄棒となったが、ニャル子は空中で回転して勢いを殺したようだ。

「ほら、ほぉら。『反射』は切っといてやるから、さっさと来な。
でないと―喰われるぞ？」

「―ガァァァァァァァァァァァァァァァ!!!」

白き竜の咆哮が響き渡る。

「さぁ、最強のハイブリッド種よ！
今のお前のパワーで、あいつらをブチ殺してしまえ！」

巨大な爪が、叩きつけるようにして襲い掛かる。

「ｄｏｏｏｏｒ!?」
「「「……ハァ?」」」
あの黒フードに。

「イデデ……やっべ、ひ、避難だぁ!!」
「グルオオオオオオオオオオオオ!!!」
「逃がすかぁぁぁぁぁぁぁ!!」
慌ててその場から離れる黒フードと、それを追い掛けるインドミナスレックスと一瞬でフルフォースフォームに変わったニャル子。

「ガァァァァァァァァ!!」
「ちょ、だから、私はエサじゃないいいいいいいい!!」
「腐☆腐。　お笑いだなぁ！
精々やるだけやって、仲良くインドミナス・レックスの腹の中にでも行くんだなぁ！」

インドミナスがターゲットをニャル子を変えた隙に、黒フードが、鉄で覆われたジャイロスフィアのようなモノに乗り込む。

「!?　テメェ!!　クー子、ハス太!!」
「……とりゃー」
「ふっ！」
「クケケケケ、無駄無駄無駄ぁ！
その程度の攻撃では、改良版１人用ポッドを破壊することは出来ぬぅ!!」

本気モードのクー子とハス太の攻撃がジャイロスフィアモドキに炸裂し、そこそこの規模の爆音と閃光が発生する。

「…あー、２人とも。　もう攻撃を辞めていいぞ」
「……でも少年、アレはまだ生きてる」
「大丈夫だ。　あのバカ、たった今自分で死亡フラグ立てたから」
「「……あぁ」」

「―よし、じゃあさっさとおさらば
「グォオオオオオオオオオ!!」
!?!?　まさか―や、ヤメロォ!?!」
ジャイロスフィアモドキはインドミナスに噛まれて、メキメキと異音をたて始める。
「ちょ、これマジでヤバイヤツ!?
あ、明日まで！　明日までお待ち下ｓ
『メギョッ!!』
マジで待ってええええええ!?!?」
「逆に明日になったら潰されてもいいのかよ!?」
邪神達の攻撃をくらい、傷一つ無かった球体が、メキメキ潰れて逝く。
黒フードも観念したのか、絶叫が止み、なにやら悟ったような事を口にし始めた。

「……やはりポッドは、圧倒的な力を持ったモノに潰されるＳＡ☆ＤＡ☆ＭＥなのか」
「分かってて死亡フラグ立てたのかよ!?」
「だってわざと死亡フラグを立てると効果が反転して、むしろ生存フラグになるって聞いたんだモｎキーパンチイイイイイイイイイイイイイイ!?!」

グチャァア!!

悲鳴、異音と共に、遂にポッドが真っ平らになった。
で、そのポッドを咥えたまま回転、

「グォオォオ―ォオォオオオ―
―グガァアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ソォオォオォオォオォオォオォオイ!!

地平線の彼方の向こう側に吹っ飛ばされる―って、
「ちょっと待て今の投擲音はどっから出た!?」
「へ？　何かみょんなところありましたか？」
「……特に無かった」
「ああそうだな」
「よく聞こえるようにお前らの耳掃除してやろうか？　フォークで」
「さぁ、後はインドミナスだけです!!
……ボコれば戻りますかね？」
「お前らの本気モードと違って、成長でああなっちまったんだろ？
となると……クー子、例の薬は？」
「ん……はい」
「いやどっから出してんだよ!?」
クロスファイアシークエンス状態で臀部まで大きく開いた背中の下の方から出したんだけど!?
そこスペースすらないよね?!
「じゃあ、まずはコレを食べさせてみますか！　クー子、幾つか手に持って構えてなさい！　アンタごとインドミナスに喰わせます!!」
「……ニャル子、流石にそれは痛いじゃ済まない」
「あぁ？　なに言ってるんですかんな事分かってますよついでにアンタごと亡き者にしようとしてるんですよ察して下さいよ」

「……二人共、喧嘩を辞めろ」
「ワァット？　ハス太あなたこんな脳味噌固形燃料の肩持つｋ」
ニャル子とクー子すらフリーズする。

僕らは、インドミナスとバッチリ目が合っていた。
アレだ。　映画のシーンでもあった、恐竜が片目でコッチを見てくるシーン。
あのまんま。

―て、言う事は、

「ガァァ

―ピィピィ！　ピィピィ！

「!?　このタイミングでか！」
「？　ハス太、なんだこの音？」
なんか胸元の辺りから聞こえるような……

「今回の敵、次元振動で現れた可能性を考え、その余震を察知して警報がなるアプリをｉＡｉＡＰａｄにインストールしておいたのだ」
「余震なんてあるのか?!」
「極僅かにだが。　だから、次元振動の発生する場所は近いぞ！」
「……ていうか、アレがそうか？」
「」

ニャル子とクー子の向かう先の景色が、突如歪む。
あまりに突然の事で、ニャル子とクー子は止まり切れずそのまま入ってしまう。
「―ままよ!!」
「オイオイ僕らも突っ込むのかよオオオオオオオオオオオオオオ!?!?!」
「ガァァァァァァァァァァ!!」
続いて僕らと、邪神達の脚について来れてたインドミナス・レックスが、空間の歪みに飛び込む。

そこは――

4話

side真尋

―ここは、何処だ？

―確か、僕達はルルイエで……

「……なんでジャングルなんだよ。

そして暑っ!?」

一瞬で汗が吹き出してくる。

「…このままじゃ熱中症待った無しだな。　その前にニャル子達と合流しないと」

ジャングルの道を歩いていく。

……それにしても、大きな道だな。

デコボコしてるから多分未整備だけど、その割には道幅が広くて歩き易いし―

「―まひろくん！」

「！　ハス太！　無事だったか!?」

歩き始めると、すぐにハス太と合流出来た。

「よかった。　歪みからでたらいなかったから…」

「バラバラな所に飛ばされたみたいだな。　タイミング的にインドミナスも近くにいるとして、問題は先に飛び込んでたニャル子達だな。

離れてないといいんだが……

……ところで、ハス太は暑さとか大丈夫なのか？　汗かいてないけど」

「風をふかせてるからね、すずしいよ！　ちょっと待っててね」

すぐに少し強めの風が吹き始める。

……クー子とハス太がいれば、大体の環境でやっていけるよな。

〜少年邪神移動中〜

……

「…いないね」

「まぁ、ジャングルに迷い込んだんだ。　すれ違ってるかもしれないしな」

……しっかし、ここが地球上だと仮定して、何処なんだよここ。

環境問題が騒がれてる僕達の世界の地球でこんなに鬱蒼としたジャングルとなると、それこそ赤道直下の大陸とか、その辺りが殆どだ。

そしてその大半のジャングルが、恐ろしいほど広い。

……下手したら、もうこのまま人に会えないかもしれないな。

「ま、まひろくん……」

「？　どうした、ハス太？」

「な、何か、きこえない？」

「？」

耳をすませてみると―

鳥のさえずり、何かが羽ばたく音、地響きの様な足音、水の流れる音、―

……足音？

―ドドドドドドドドドドドドドドドドドド―

「……」

「ちか付いて……きてるね」

「……来てるというより、もう目の前じゃん!?」

咄嗟にハス太の手を引いて、近くの大木の陰に隠れる。

そのすぐ横を通り抜けたのは、―

「あれって、―ガリミムス!?」

「映画で見たまんまだな!?」

1、2、4で出て来た、群れで行動する草食恐竜―ガリミムスだった。

……ついでに、その内の一頭にしがみついてる白い物体と紅い物体があったが、スルーした。

「―まっひっろさ～ん!!　会いたかった

「思いっきり楽しんでたよな?　恐竜ライド」

……探索の幅を広げる為でしt」

「クー子」

「捕まえるためにわざわざ生体時間加速(クロックアップ)していた」

「」

いつもなら、フォークを刺すタイミングだけど―

……偶には、見逃してもいいか。

「……少年、途中で凄いものを見つけた」

「凄いもの？」

「あぁ!?　私が報告するハズだったのに!?」

「……早い者勝ち」

「で、結局何なんだよ？」

話がズレそうだったので強引に戻す。

「それはですね……

―ビジターセンターです！　ジュラシックパーク跡の！」

「……はぁぁぁぁぁ!?!?!?」

―ビジターセンター跡　内部

……屋根も扉も、建物の大半が倒壊してるけど……

あの特徴的な、ラプトルの絵が描かれた壁は無事だった。

「ていう事は、ここはイスラ・ヌブラル……」

「それも倒壊の具合からいって、劇中でインドミナス・レックスがぶち

壊していった後みたいですね。
ぺちゃんこになってましたが、ジュラシックパークのマーク付きのジープがありましたよ」

……次元振動……本当に異世界へのゲートだったのかよ。

「ちょっとまって！　ここが映画のせかいだとして、じゃあ今は『いつ』なの!?」
「……確かに、気になる。
ぱっと見ここも壊れたてに見えるから、本当に直後なら、劇中のインドミナスレックスは勿論、翼竜にも気をつけなくちゃいけない。
事後ならティラノサウルスとヴェロキラプトル、それに作中に出てこなかった肉食恐竜も危険」
「それに、脱出も問題ですね。
都合良く私達の世界への次元振動が起きれば話は別ですが、期待は出来ませんし……
事後なら救出される可能性は低いですし、本来パークにいない人がいるのがバレれば面倒です。　結界も効果があるか分かりませんし」
「…つまり、ベストなのは帰り道が発生する事。　ベターで劇中の脱出船に潜り込む、か」

中々ハードだな。　そもそも、今が『いつ』かによっては後者の選択肢は取れないし。

「おやおや真尋さん。　もう一つクリア条件を忘れてますよ？」
「忘れてねえよ。
―取り返すぞ。　僕達の世界のインドミナスを」

「―それで、いの一番に確認しなければならないのは、今現在の時間です。　1番手っ取り早いのは、原作主人公であるあの兄弟かカップルと合流することですが……
　必然的にインドミナスとの接触が困難になります」
「……なら、島の南側の避難エリアの様子を伺えばいい。　人が大勢いれば、まだ時間の猶予はある。
　原作インドミナスの行動予測も―」
「…？　どうしたクー子？」
　台詞の途中で突然フリーズする。
　まさか、近くになにかいるのか!?
「……出来ない」
「？　ハッキリしなさいよクー子。　モササウルスのエサにしますよ？」

「……原作インドミナスの行動予測が、出来ない」

「…？　だいたい映画どうりにうごくんじゃ―」
「……劇中でも、翼竜ドームを破壊した後は、ラプトルの狩りのシーンまで一度も描写がなかった。
　つまり、昼から夜までの間は、いつ、どこに居るかが分からない」
　つ、つまり―
「次の瞬間に、頭からバックリ逝かれるかもしれんということですか……」
「だからフラグを立てるなぁ!!」

「フラグとはへし折るモノです！　その為には敢えてフラグを乱立
――」

「――グルルルルルルルルル」

「」
「」
「…………へし折ってこいよ、死亡フラグ」
「ムリｄｅａｔｈ」
目の前の木々の隙間からインドミナス・レックスがコンニチワ。

「――ガアアァァァァァァァァァァァァァアア!!!」

「逃げるぞ!!」
「あれが僕らのインドミナスのかのうせいは!?」
「どうやって見分けるんだよ!?」
全力で走る。
……でも確かにハス太の言う通り、見分ける方法を探さないと――

「―ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」
「ぎゃあ!?　い、いつの間に前に!?」
「先回りされたのかよ!?」

気がつけば、いきなりインドミナス・レックスが目の前に―

「「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」」

「」
「…／（^ o^）／」
「／（^ o^）／」
「お前らどうやって発音した?!」

前からも後ろからもインドミナス・レックス。

……詰んだ?!?!

第５話

ｓｉｄｅ真尋

「――グルオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」
「ギヤァァァァァァァ!?!」
２頭のインドミナスレックスの咆哮が響き渡り、殺戮衝動全開の怪獣決戦が始まる。
「でんじゃーっっ!!」
「おわ、あ、あぶ、ああ、あっぶねぇっっ!!」
払われた尻尾をなんとか躱して、走って逃げ出す。

「ぜえ、ぜえ、ま、待ってください、真尋さ～～ん。　私、もう体力が、」
「は?!　何時ものチート体力はどうしたんだよ?!」
「１年間もぶっとおしで逃げてちゃ、そりゃ疲れもしますｙおてぃぬすっ?!」
「メタいわぁ!!　うおっ?!」
息絶え絶えなニャル子に振り返ってツッコんだ瞬間、横方向にすっ転ばされる。
「イッッッッ……
い、一体何が……」
「……少年、静かに。　ここも安全じゃない」
「クー子!?　おま、何やって――
……ホントに何ヤッてるんだよ」

転んだ時にダウンしたのか、微妙に抵抗力の弱いニャル子のスカートに、頭から突っ込んでる変態（クー子）を冷めた目で見る。
「……何って、人工呼吸」
「代わりにアンタの息を永遠に止めてやりましょうか!?」
両足でクー子の首をロック、１８０度回転させて地面に捻り込み、反動で跳ね起きるという無駄に高度な無駄な技術を使った技が決ま

る。

「全く、油断も隙も無いですね。

……まあ、私と真尋さんを救ってくれた恩に、すこ～～～しだけ手加減しましたけど」

「えぇ……（ドン引き」

どう見てもオーバーキルな惨状に目を逸らすと、足元、ズボンの裾に赤いボールの様な何かがくっついてることに気がつく。

これって……クー子（トウ）の遠距離攻撃武器（グ）（名前忘れた）（ア）だよな？　いきなり足が縺れたと思ったら、こいつが原因だったのか。　こんな所で座り込んでられるのも、大木の裏側に転がり込んだからか。

……まあ、ここだっていつまでも安全ってわけじゃない。　１０メートルクラスの大型がガチ戦闘してるわけだから、それこそ今すぐにでも逃げないと。

「あ、ところでハス太ってどうした？」

瞬間、踏みつけるニャル子と悶えるクー子の動きがピタっと止まる。

「……おい」

「な、ナニヲイッテルノカ、ワタシニハサッパリ」

「……邪神がそんな簡単にやられると思う？」

「声が震えてるぞ。　それに勝てねえって断言したのお前らじゃねえか」

「……」

「……」

「……」

「……ほ、ほら！　友情、努力、勝利っていうじゃないですか！」
「いつからここはジャ○プの世界線になった思いっきりユニ○ーサルだろうが。　それに僕、お前らが努力する所一度も見たことないんだけど」

「……」
「……」
「……」

「……殺られた所は見てないんで。　多分、きっと、メイビー、生きてるじゃないかと、うん、大丈夫デスヨ……」
「うおおおい!?」
　ニャル子の肩を掴んでガックガクに揺さぶる。

「そ、そもそも！　そりゃあんなティラノと何処ぞの傘製ＢＯＷをフュージョンさせたようなヤツ相手に１年も鬼ごっこさせるうｐ主が全ての元凶ですよ?!　そりゃひっそりと逝きもしますよてか１年ですよ、１年?!　放置し過ぎなんですよ!!」
「それには全面的に同意するが、お前らなら幾らでもやりようがあったろうが?!　シャンタッ君で上に逃げるとか！」
「カプセルにしまっちゃったんで、また出すとなると数瞬無防備になるんですよ！　その間にパックリ逝かれてジ・エンドです！　それに上がったら上がったで翼竜が飛んでるんでカプコンヘリの二の舞になります！」
「そういえばそうだったァっっ☒?!?!」

　バキィッ、という音と共に、僕らが隠れていた大木が頭上スレスレでヘシ折れ、インドミナス（２）が吹っ飛んで来る。

「グルルルル……」
　……メトメガアウー

「あ、あはは……
僕って、ほんとバカ」
「真尋さーん!? 気持ちは分かります！ 分かりますけど、中の人ネタでそのセリフはやめて下さい色々とアウトです具体的には死亡フラグとかァ!!」
前から大口を開けたインドミナス（2）が突っ込んで来る。
振動からして、背後からも同じ様に来てんだろーなーあはははは
（ヤケクソ）
あぁ、目の前が真っ赤に――――

――ドッゴオオオオオオオン!!!
「グギャァァァァァァ!?!?!?」
「グルォア!?」
突如、背後のインドミナス（1）の顔面で爆発が起きて、その巨体を地に叩きつける。
突進を強制キャンセルするだけの爆発に怯み、
『――邪魔だ、デカブツっ!!』
「グギャァァァァァァ!?!?!?」
見覚えのある、青と黒の頑丈そうなジープがそのドテッ腹に激突する。

これには堪らずインドミナス（２）は逃げ出し、先に倒されていたインドミナス（１）もその場から慌てて逃げて行く。

「……た、助かったのか……？」

呆然としていると、ジープの運転席と助手席の扉が開く。

運転席側はベストやショットガンで完全装備で、ヘルメットで顔は見えないけど、助手席側から出てきたのは――

「――まひろくん！　ニャル子ちゃん！　クー子ちゃん！」

「ハス太!?　あんた無事だったんですか?!」

「うん！　にげまわってたらこの人にバッタリあって、そのまま恐竜をおいはらえる隙をまってたんだよ」

「それならそうとハヨ言わんかい！」

ニャル子とハス太のいつも通りのやりとりをみて、ようやく落ち着ける。

「よ、よかった……」

「疲れてる所悪いが、いいか？」

「え、あ、はい」

座り込んでいたままだった僕に手を伸ばすヘルメットの人に助け起こされると、その細部に編まれた、”ティラノ骨格のマーク”が見える。

「――ジュラシック・ワールド警備部、ロバート・マルドゥーンだ。アンタたちが谷に残ってた客で合ってるな？」

武骨なショットガンをスリングで下げたその人がヘルメットを外すと、３、４０代くらいのオッサンの顔が映る。

「えっと、ハイ」

「ならいい。　先に車に乗っていろ」

そういって背を叩くと、インドミナスが大暴れしていた方へ歩いて

いく。

……それにしても、あいつら、妙に静かな気がするな。

具体的には、ニャル子とクー子がフリーズしてる。

「おい、どうした？」

「ばんな、そかな、」

「ああうん、話する気ないなお前。

クー子、そっちはどうだ？」

「……ロバート・マルドゥーン。

ジュラシック・パークのラプトルの飼育員」

「は？　ラプトル？　オーウェンさんじゃないのか？」

「……少年。　私は、『ジュラシック・パーク』って言った」

「いやだか、ら――」

そこまで言われて、あるワンシーンが脳裏に浮かぶ。

――枯れ木の上にテンガロンハットを置き、それを囮にする男性。

――ゆっくりと軍用ショットガンのストックを展開、頬付けして保持するも、真横から顔を覗かせるラプトル。

――『Ｃｌｅｖｅｒ（賢い）　ｇｉｒｌ（奴め）』――

思い出した。

マルドゥーンって、

「１作目（パーク）のキャラ?!　なんでワールド（４作目）に、待て、そもそも死んだん

じゃ、」
「それは映画限定の話です」
いつの間に復活したニャル子が話を引き継ぐ。
「映画限定の話？　どういう事だ？」
「映画版だとマルドゥーンはラプトルにサクッと殺られるチョイ役ですが、小説版、及びゲーム版シナリオだと生存組ですよ。　例のラプトルのシーンも、小説版ではフツーに撃退に成功してますし、ロケランとジープと麻酔銃でグラント博士（初代主人公）に襲い掛かるティラノを薙ぎ倒した挙句、一度は眠らせることに成功している、作中唯一といってもいい公式戦力チートキャラです」
「尚更なんでこんな所に?!」

よく思い出せば、抱えてたショットガン1作目と同じだし。　あの特徴的な折り畳みストックは見ればわかる。

「……助けてくれたのは事実。　生存していてもおかしくないならそれでいい。　幸い、向こうは私たちをゲストと勘違いしてるから、そこを利用しよう」

取り敢えずの方針を決めた僕らは、言われた通り、ジープに乗り込むことにした。

――しばらくして、深い熱帯の森をジープが走破する。
森を抜けると、舗装された道が姿を現し、閑散とした建造物群が見える。
すぐ側には、円錐状の茶色い屋根の、ワールド版ビジターセンター。
「よし、ここまで来れば大丈夫だ。
後はセンター内の連中に言えば避難域まで逃げられる」
そう言って僕らを降ろすと、「じゃ、うまくやれよ」とだけ告げて、さっさと何処かへ走りさってしまう。

「――さてと。　これからどうする?」
現在時刻は大体分かった。　余程のことがない限り、少なくとも船に乗り遅れることはないだろう。　脱出手段は確保済み。
とすると、
「そりゃもちろん、インドミナスを追いますよ。　ちょうどいい事にそこらじゅうにバギーが乗り捨てられてますし。
というわけでハス太、クー子を乗せてそっちのを使いなさい。　私はこっちを使います」
所々赤いものがこびりついてる青い四輪バギーを2台手早く調達すると、キーも無いのに針金1本でエンジンをかける。
「さあ真尋さん!　トバしますから捕まってください!　具体的には私のバストを!」
「だ、そうだクー子」
「流石少年。　分かってる」
「ギャース!?!　熱い熱い焼ける溶ける!!」
乳繰り合ってる2人を放置して、付属品らしい無線機と睨めっこしているハス太のいる方のバギーに跨る。

「あ、まひろくん！」
「どうだ、何か分かりそうか？」
「うーん。　それが、インジェン社の、”危機管理部門”のひとたちの無線をきいたら、インドミナスがセクター５に入ってからのはんのうがないんだって」
「てことは、そのエリアにいるってことだよな」
　リゾートエリアに来る途中、マルドゥーンさんから聞いた話によると、ジュラシックワールド内での恐竜の管理に使われている電磁フェンスは、本体に埋め込まれた発信機が一定区画ごとを囲ったセンサーに反応することで電気ショックを引き起こすことで機能するとのこと。
　これを利用すれば、その範囲の出入りであれば発信機無しでも追跡出来るらしい。
　だからこそ、管制室でもある程度インドミナスを追えたのか。　その結果がカプコン（マスラニの退場）へリなわけで。

「……ところでさ。
　セクター５って、何処？」
「……あ”」
「マルドゥーンさーん！　地図！　地図置いてってえええええええ!!」
　当然の如くそんな絶叫が届く筈もなく、虚しくそよ風が吹くだけだった。
「しょうがないですねぇ真尋さんは。　地図がないと何も出来ないんですか？」
「……マップの暗記は鉄則中の鉄則」
「黙らっしゃいゲーム脳。　そんな言うなら先行けオラ」
「分かりましたよ。　ほらクー子、端末出しなさい」
「……ニャル子のは？」
「使い過ぎで電池がボンバーしました」
　渋々と、クー子がスカートからスマホ――ではなく、なぜかゲーム

コントローラーを取り出し、無線機に繋ぐ。
「……コマンドなんだっけ？」
「はぁ？　覚えときなさいよそのくらい！　上上下下左右左右四角三角ですよ！」
「だからユニバー○ルだっつってんだろなんでコ○ミコマンドなんだよ!?」
『ナビゲートを開始します』
「しかも元ネタより進化してるぅぅぅぅぅぅ?!?」
　無線機特有のノイズ混じりではなく、メッチャ流暢なゆっくりボイスが機械から流れて、案内が始まる。
　ええ……こんなんでいいの??

――ナビゲートに従い、森をバギーで突き進む。
　にしても、何時ぞやの縞瑪瑙の城でも思ったけど、僕らの世界の宇宙技術は一体どうなってるのだろう。
　機械のクセして、『3分前に通り過ぎた所を右です』て。　しかもフォークで脅すと修正版でナビを始めるし。　なんでそこまでフォークが効くんだよ。
『間も無く、目的地付近です。　ルートガイドを終了します』
　すぐそこに、白字で『5』と書かれた、小さな摺鉢状の機械がビッシリ張り付いた、青い支柱がそびえ立っているのが見える。
　日はもう陰り、暗くなり始めている。　リゾートエリアの惨状を考

えれば、とっくの昔にラプトルを解き放つ準備は始まっているはず。
時間が、無い。
「急ぐぞ、ニャル子！」
「分かってます！　フルスロットルゥ!!」

第6話

side真尋

「……おらおらー」
「ヒィヤッハァァァァァ!!」

――バカ2人が目立つように（わざとだよな？　テンションの所為じゃないよな??）、奇声をあげ、エンジン音をけたたましく鳴らしながら爆走する。
音に怯えたらしいコンビーが逃げていくのを尻目に、思った以上揺れない車上から周囲を警戒する。

あのバカ共があの調子になってから、かれこれもう5分は経つのに、未だインドミナスは姿を見せない。

「まひろくん、そろそろまずいよ。　まっくらになっちゃう……！」
「ああ。　なにか、なにか手は――」
熱帯の気候の影響か、熱にやられたように頭が働かない。
くそ、このままじゃ、本当に、――

ブシャッ

……？　なんだ、この鉄っぽい匂い？
気になって、思わず匂いの漂ってくる方を見ると、

「……ニャル子、ニャル子ォ……」ドクッドクッ
「ギィヤァァァァァァ!! ど、何処になに突っ込んでるんですか?! つかあっつ!? アンタ体温どうなってるんですか?! え?!? クトゥグァって自分の熱は平気なのに他所の熱ではフツーに熱中症になったりするんですか?! なんてハタ迷惑な!!」
首の所からガッツリ両手を服の中の前面に突っ込んだクー子が、鼻血でバギーをニャル子ごと塗装しながら力無く項垂れている。
その声に覇気はなく（普段から無いけど）、目も何処か虚ろだ。
「おいぃ?! 一旦止めろ、匂いでヤバイのが寄って来たら、どうす、る……」
……アレ？ 僕らって今まさに、そのヤバイのを探していたんじゃ――

――ズシン――

わずかに、重いモノが地に落ちたような音が聞こえる。
バギーから鼻血が滴るテンポが、一瞬だけ、早くなる。
「ま、真尋さん……」
「……ニャル子、手榴弾のピン抜いとけ。 ハス太、クー子の看病頼む」

抑え込むにしろ、撃退するにしろ、単純な火力ならニャル子を上回るクー子のダウンは痛い。
そう考えて指示を出す間にも、少しずつ足音は大きくなる。
真っ先に匂いに寄りそうな腐肉食生物が居ないことが、ソレが、聞き違いでないことを証明する。

――ズシン

――ズシン！――

――ズシン!!――

――ズシン!!!――

「グルルルルルル……フゥウウ…………」
ついに、足跡のヌシが姿を見せる。
血の匂いの元であるクー子を視界に収め、匂いを確かめるように鼻で一呼吸置き、咆哮する。
「――ゴォアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」
「オッリィヤァアアアアアアアアアアア!!」
咆哮した隙に放られた冒涜的な手榴弾は、的確に足元を爆破。僅かに怯む。
「はっはー! 流石に最大威力なら通用しますか!! おらもう一丁!!」
「おいニャル子!? それはやり過ぎだ!!」
好機と見たのか、盛大な数投げられた手榴弾は、

「グルッ!」

ブンッ! ↑前足を振る音。

コンッ! ↑手榴弾が弾き返された音。

「「…………あ〃」」

ちゅどーーーん！

跳ね返された手榴弾が目の前で派手に爆発する。

……ん？　その割には、ダメージの無いような？

「――ふ、ふぅ～～。　間一髪でした……」

「おいニャル子？　どういう意味だ？」

「ギリッギリで宇宙ＣＱＣをワザとファンブらせることに成功したんですよ！

……まあ手持ちの冒涜的な手榴弾、あれで全部だったんですけど」

「おいいいいいいい!?!

そ、そうだ！　前に使ってたＲＰＧ（ロケラン）はどうした?!」

劇中でもロケランで転倒させているし、爆発を受けて逃げるところを生で見ている。

宇宙の謎技術が混ざったロケランなら――

「あー……大変申し上げにくいのですが、あのロケランは事前許可の支給制でして。　それに私、最初のルルイエでの一件で、『冒涜的な手榴弾は私の数ある宇宙ＣＱＣの中でも随一の威力』と言った気が……」

「なん……だと……?!」

そんな、まさか、うそだ、――

「という訳でして、こうなったらクー子を餌に一旦体制を立て直ｓ

「お前が前に言った設定をちゃんと持ち出すとか、さてはお前ニャル子じゃないな?!?」

『悲報』　真尋さんの私への評価が想像以上に酷かった件について」

オヨヨと泣き崩れ、アホ毛もシオシオと枯れる。

「――グルァァァァァッッ!!!」

「あ、ヤベっ」

律儀に待っていたのか、再度咆えるインドミナス。

「急いで逃げるぞ！　ハス太！　そのままクー子を頼む！　ニャル子――」
運転頼む、と言おうとして、ピンと立つアホ毛が、て事は。
「――邪神。　私たちの世界線の神話生物です!!」

「――その通り。　また会ったな、八坂真尋っ！」
「グルゥアアアアッッ?!?!?」
突如、インドミナスの足が黒い沼に嵌り、身動きが出来なくなる。
いや、それ以前に、この声、は、――

「――ニョグ太、だと?!」
「そのとぉぉり!!」
沼の一部が盛り上がり、見覚えのある人影になる。
ウソだろ?!　だってアイツは、イースの連中に囚われてるんじゃ、

「ふはははは！　幾ら高等技術を持っていようが、所詮菌は菌！
この俺を捉え続ける事など出来ぬ！
それどころか、再度コイツを奪われる程のマヌケだったな！」
コイツ、を強調したタイミングで抜いたのは、これまた見覚えのある拳銃型の機械。
「……ニョグ太？　ま、どうでもいいです。

それより、なんでアンタみたいなポッと出モブが、そんなモノ(ハイパーイース)なんて持ってるんですか!?」
「拾った」
「ウッソだろお前?!」
確かに『テキトーなトコにポイするですョ』とは言ってたけど!!
前科持ちがあっさり見つけるような所に置くとかあり得ないだろ?!?

「だ、だとしても！　なんでお前がこんな場所にいるんだよ?!」
「よくそ聞いたな！　あの一件の後、宇ー〇ューブに戻った俺に居場所はなかった。　クビにされたのだ!!」
惑星メー〇ルみたいに潰れれば良かったのに。　あんな人を機械に組み込もうとする会社。
「だから私は復讐を誓った!!
具体的には、宇ー〇ューブとミゴミゴ動画の再生数1位を獲得する事で」
「メッッチャ平和的だなオイ」
「だが、壁として立ち塞がったのは、動画のネタが無い事だ。
悩む傍、手慰みにハイパーイースを弄っていたら、見つけてしまったのだよ。　そう――

――意図的に次元振動を引き起こす機能をなぁ!!」
「「なっ!?!?」」
つまり、あれを奪い取れば、帰れるって事だよな!?
「もっとも、未知のエネルギーを相当量使うようで、もう帰りの分しか残ってないが、まあそれはいい。
肝心なのは、この世界だ！」
捉えられ、未だもがいているインドミナスを指し、高らかに言う。
「――こいつら、『ジュラシック・パーク』シリーズの恐竜を捉え、俺

の手で究極のパークを創り上げ、動画を撮る!!　そして俺をクビにした経営陣の悔しそうな顔を肴に美味い麻婆を食って愉悦る!!
　既に試験で異世界の物体を持ち帰れるのは確認済みだからな！」
「ソーナノカー」
　うん、セリフの端々から何処に逝ったのか察せたよ。　お前もある意味被害者だったんだな。

「ふはは、ふぅ。
　最早貴様らなぞどうでもいい。　そうやって指を咥えて見ていればいい！」
「ハッ！　状況が分かってないのはアンタですよ。　もういっぺん校庭に埋めてやりましょうか?!」
「バッチリ覚えてんじゃねえか!!
　だが、俺はあの時とはもう違う。　貴様らでは麻婆の力を取り入れた俺には勝てない!!　ぬおおおおおおおおおおお……」

　ゴゴゴゴゴと地響きが鳴り、ニョグ太の身体が人の形を保ったまま肥大化する。

「麻婆ってなんだよサ○ヤ人の血か核物質かよ?!」
「少なくともどっかの泥よりかは力が高まる、溢れるぅ!!!」
「帰れ本気狩ル☆キチガイ!!」
　ガチムチ化した変態が外見に似合わないスピードで距離を詰め、拳を突き出すのを、ニャル子がバールの二刀流で受け止める、が。
「ムダァ!!」
「チッ！」
　一撃で2本とも木っ端微塵になり、ダメージこそなさそうでもニャル子が押される。
「ハス太ッ!!　クー子はまだか!?
　……ハス太?」
　フォークは刺さるもダメージが余り通ってないようで、それでも援

護射撃しながら声をかけるも、返事が返ってこない。
気になって後ろを見れば、

「……そうか。　あの世界線に妙な跡があったと思ったら、テメエかゴルゥァ……!!」
「――!?　――!!」
指をゴキゴキ鳴らす、インドミナスに潰されたハズの邪神がいた。
その後ろには、半透明な、結界のような空間に閉じ込められたハス太とクー子が。

「――!?!　クッ、」
「安心しろ、ニャルラトホテプ。　私の狙いはそこのバカだけだ。
……覚悟は、いいな？」
フッと、虚空から現れた刀を握る。
「……クソッ！」
流石に己の不利を悟ったのか、慌てて下がりながらハイパーイースの銃口を――僕に向ける。
「――ッ!?!」
「真尋さん!!」
「――死ねぃ！」
撃ち出されたエネルギー弾をニャル子が急いで打ち返し――
そのまま、動かなくなってしまう。

「?!?　にゃ、ニャル子?!」
「落ち着け。　ただの時間停止だ」
邪神が足元の影から飛び出してきた古い銃でニャル子を撃つと、

「――りゃぁ!!　っと、真尋さん？」
「よ、良かった、助かった。
……その、ありがとな」

「いえいえ。　夫を守るのは妻の仕事ですし」
「……お前には言ってねえよ」
隣を見ると、いつの間にか邪神は消えていた。
ついでにインドミナスを捉えていたニョグ太の『タタールの黒き拳』も。
インドミナス本人（人？）は、僕らと会うと酷い目にあうと思ったのか、イライラした様子で逃げてった。

「……そうとう、面倒なことになっちゃいましたね。　あのインドミナス、背中に抉ったような痕がありました」
「てことは、本編の個体か」
「ええ。　そして、あちらを見てください」
ニャル子が深刻な表情を向ける先に目をやれば、薄く煙が立ち上がっている。
耳を澄ませると――――銃声と、悲鳴のようなモノも。

「――ラプトルが、解放されてしまったようです」

第７話

ｓｉｄｅ真尋

クー子とハス太を回収して、エンジン音のしないようシャンタッ君で移動する。
不慣れなジャングルをバギーで進むのは危険だし、匂いを追う事も出来るから、一気に便利になった（相変わらず耳栓必須だけど）。
「なんで最初からシャンタッ君使わなかったんだよ？」
「インドミナス２頭ですらヤバイのに、象並みの大きさのＵＭＡがいきなり出てきたらマズイですよ。　見られたらどうするんですか？」
「なるほどな。
で本音は？」
「ぶっちゃけ思いつきませんでしｔぁなとす?!」
ちっ、避けたか。

「……ニャル子、シャンタッ君が追ってる匂いは、本当にこっちに来てたインドミナスであってる？」
「大丈夫ですよ。　あらかじめ幸運で振っておいたら成功しましたから！」
「おいホントに大丈夫なのかそれ？」
不安になってきた。　やはり多少の無茶はしてでも二手に分かれるべきだったか？
「だいじょうぶだよ！
きっと、すぐに会えるよ！」
「……そう、だな。
それより、暴走してるあいつを戻してやる方法を考えないとな」
ニャル子に会ってからの発言を思い出せる限りで洗い出す。
どこか、伏線のようなポイントは――

「ギギギギギギ!!?!」
「うぉ?!」
急にシャンタッ君がその足を止める。
何事かと前を見れば、暗闇の中に佇む、白い巨体が、

インドミナス・レックスが。

▽あっ！　???の　インドミナス　があらわれた！

ちょっと待て。
「なんでポケモン?!」
「モンスターを捕獲するとしたらやっぱりポケモン風でしょ！」
「でもモンスターボールのパチモンの契約カプセルにはあいつ入りきらないんだろ？」
「……」
「……少年、君のような察しの良いガキは嫌い」
「うるせぇハヨ直せ」
「……ぶーぶー」

視界の下の方に映っていた文字列が消えた。　こいつも律儀に待っているのか、未だ襲ってくるような様子はない。
「しっかし、実際問題どうしますか？　ゴリ押しは無理がありますし」
「……急なことだったから、例の薬も数が無い」
それだよなぁ。　何をするにしても、手がなさ過ぎる。
「……しょうがない。　取り敢えず、」
動きを封じよう、と言おうとしたタイミングで、インドミナスが動き始める。
でもその動きは、非常にゆっくりとしたものだった。
「？　やけに鈍い――というか、殺気が薄いですね？」
「そうなのか？　でもどうして、っと?!」
条件反射で抜いていたらしいフォークを落としてしまう。
ずっと暑い熱帯雨林にいたから、汗で滑ったか。
地面に落ちたフォークが甲高い金属音をたて――
「グギャァァァァァ?!??!」
「……は???」
吠えながら、ジリジリと後ずさる。
あれ？　この反応、どこかで――

――試しにフォークをポッケから取り出す。
――「ピィィっ！」
――震えが一段と強くなる。
――フォークをしまう。
――震えが少し収まる。
――フォークを取り出す。
――震える。
――フォークをしまう。

――震えが収まる。
――フォークを取り出して金属摩擦音を立てる。
――失神した。

「――分・か・る・か・か・ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああ!!!!」
「ピギャアアアアアアアア?!???」
　追加で出したフォークを握りしめたまま叫んだら、メッチャ怯えられた。　向こうのほうが6、7倍デカイのに。
　つか伏線近ッ?!　てっきり原作から適当に引っ張ってくるか誤魔化してゴリ押しするもんだと思ってたら、まさかのちゃんとした(?)伏線があったよ?!　アレか?　1年前のプロットとっといてたのかよ?!　まどマギやら東方やらで根刮ぎ吹っ飛んでるもんだと思ってたぞ!?
「真尋さんメタい!　メタいです!!
　例えクソザコうp主が最新作ブームに乗っかって投稿↓他作への宣伝を計画しているようなクズでもそれは考えちゃやダメです!!」
「お前の方が罵詈雑言吐いてね?　つかぶっちゃけ乗り遅れてるよね?!」
「それもいっちゃいけないよ!　泣いてるひとだっているんだよ!」
「……あの、いつまでインドミナスは放置するの?」
「「あ」」
「グルルルル……」
　まだビビってる様子のインドミナスに向き直る。
　所々焼けていたり、弾痕があるけれど、あまりダメージは受けてないみたいだな。
「よーし!　こうなったら、後はニョグ太をブチ転がしてハイパー

イースをゴウ・ダ＝ツすれば万事解決ですね！」
「だな。　で、どうやって追う？」
「船での脱出が不要になった以上、制限時間は無いに等しいです。さらにニョグ太が無茶な原作介入をしない限り、インドミナスレックスはここにいる1体のみ。　十中八九襲撃があるハズです。　つまり、探さなくても向こうからノコノコやってきたところを踏みつけて谷に蹴り込めばおｋです!!」
「それノコノコ違い、それじゃ亀だ。
　……ところでさ、あの邪神、ニョグ太を殺しにかかってたじゃん？」
「ええ。　そのうちガチギレして『ゲート・オブ・ヴァビロンッッ!!!』とか叫びそうなレベルでしたね」
「何故にＡＵＯ？
　で、ソイツ。　ハイパーイースごとグシャっと殺っちゃう可能性は？」
「今すぐ探しましょうマッハで行きましょう寧ろ制限時間縮まってたぁぁぁぁぁぁ!?!!」
　グルンッ！　とシャンタッ君が方向転換して、がむしゃらに走り始める。
　理性が戻ったインドミナスも、後ろからついてくる。
「おい!?　アテはあるのか??」
「はい!!
　時間帯的に、ガチでパークを丸パクするならシステムとか遺伝データを盗む為に、ビジターセンター内に潜入している可能性が高いです！　あそこはホスキンス（クソデブ）がブルーに殺られてからインドミナスがモササウルスに喰われるまではコントロールルームにメガネのオッサンが1人いるだけで、しかもそれ以降は無人になります。　これ以上ない絶好のチャンスです！」
　な、なるほど――って、ちょっとまて?!
「それだと原作勢とバッタリ会っちゃうんじゃないか?!」
　インドミナスを連れてたらヤバイだろ!?　特にティラノ!!
「だから、ワンチャンに賭けます!!

着くのが、戦闘終了後、尚且つニョグ太の目的が終わる前であると!!」
「む、無茶苦茶だ！」
でも、そうは言っても、もうその奇跡を信じるしか、
「あ、真尋さんは奇跡とか魔法とか願わないで下さいね。　フラグになるので」
「お前らじゃあるまいしやるかぁ!!!」

第８話

ｓｉｄｅ真尋

ズシン、ズシンと大地を揺るがす足音をＢＧＭに、もう何度目かの森を抜ける。

ま、僕はシャンタッ君の上に座ってただけだけど。

「――まひろくん、できたよ！」

「……手の届く範囲は。　歩きながらだと足周りは無理」

「ま、小細工ですらない悪足掻きみたいなもんだ。　あれだけでも上出来だよ」

この２人には、インドミナスの応急手当を頼んでおいた。

具体的な怪我は、マルドゥークさんがジープで体当たりしたのと、インジェンの部隊のロケランのダメージが頭部と左脚に、同じくインジェン部隊＋αに撃たれた銃創が多数。

分かってもらえたと思うけれど、原作でラプトルと会話したのはこっちのインドミナスだった。　まあ、動くモノ＝敵ｏｒ餌な原作インドミナスが、言葉が通用するとはいえラプトルと会話した理由に納得がいったよ。

それで、治療を頼んだ理由としては、

――ＧＯＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡａａａａａａａ――

「ひっ?!」

「……大丈夫。　遠い」

さっきからちょくちょく轟く、どこまでも響きそうな咆哮。

ティラノサウルスの声が聞こえるからだ。

恐らく、いや確実に、あの〝楽園の女王〟とは戦うことになるだろう。

「……おい、ニャル子。　あれ」

「ええ。　ビジターセンターの屋根ですね」

赤々と照らされた夜空に、藁製っぽくみえる屋根が浮かぶ。

「――さて、クライマックスといきましょう!!」

―ビジターセンター前

扉のサイズ的に入れそうにないインドミナスとシャンタッ君から降りる。

もう既に原作イベントは片付いた後のようで、所々建物は崩壊、火を吹いていて、モササウルスのいる湖を囲う柵は破壊され、その部分だけ僅かに湿っている。

……数時間前も既に惨状だったけど、これじゃ完全な地獄だな。

「レクシィとブルーは……いないようですね」

「よ、よかったぁ。　あの2ひきとはたたかいたくないもんね！」
「それには同意だな」
辺りを警戒するクー子たちの言葉に同意して、ビジターセンターを見据える。
……にしても、色々とボロボロだな。
あの窓のガラス割れとか、翼竜が突っ込んだのか――――ん??
なんだ？　今窓の方で、チラッと赤い光が見えた気が……？
「それじゃ、突撃します、よ……？」
「？　ニャル子？」
猛っていたニャル子が、突然僕の胸の1点を指先でトントン突く。
その部分を見ると、小刻みに震える、小さな赤い点が。
これって、……レーザーポインター??
なんでこんなモノが――

――ＰＯＲＯＲＯＲＯＲＯＲＯ!!

「？」
なんの音だ、と口を開きかけて、
扉を破壊する勢いで黒いカゲが飛び出して、襲いかかってくる!??!
「ＧＩＳＹＡＡＡａａａａ!!!」
「ギャァァァァァ?!?!　ちょ、これシャレになりません!!　ヘルプ！ヘルプ!!」
丁度間にいたニャル子を押し倒し、噛みつこうとするのをバールで防いでいる。
異様に長い手足で引っ掻こうとするのをクネクネ、割とガチでキモい動きで避けるニャル子に覆い被さる『ソレ』は、見たことのない、悪魔のような、竜。
「こ、コイツは、一体、」

「――また会ったな、八坂真尋ォ……！」
呻くような声が聞こえるセンター方向に振り向けば、満身創痍と言った具合のニョグ太が。
そしてその手には、レーザーポインターの取り付けられたハイパーイースが。
「ニョグ太?!」
「クックック……無様だなぁ、ニャル子ォ!!　もう逃がさん!!　確実に息の根を止めてくれるわぁ!!!」
ニョグ太がニャル子に照準を向け、横に飛び出たボタンを押すと、さっきと同じ、甲高い機械音が鳴る。
それを合図とするように、黒い恐竜が一層力を込める。
「ふは、ふっはははははぁ!!」
「おいニョグ太！　なんなんだ、コイツは?!」
「ふ、なんだかんだと聞かれたら、応えてあげるが世の情け!!」
「あやっぱいいや」
「」
白目を向いて呆然としているニョグ太をスルーして、丁度インドミナスの鼻先で吹っ飛ばされた所の件の竜を観察する。
全体的なシルエットとしては、背筋にビッシリ生えている棘といい、何処となくインドミナス・レックスに似ている。
体色は黒で、黄白な線が胴体に走る。
足にはラプトルのような、曲がった、動く鉤爪が。
……あんなの、少なくとも映画には出ていないよな？
「ふ、遅れている貴様らに特別に教えてやろう！」

何処となく嬉しそうなドヤ顔で復活するニョグ太。　とてつもなくウザイです。
まあ、話が進まないから止めないけど。
「そいつの名は、『インドラプトル』。
貴様らがこちらに来た1年後に上映された新作で登場する、ハイブリッド種だ」
「い、1年後!?」
このニョグ太は、未来から来たとでもいうのか?!
それともイースの連中と一緒にいたから、未来視でも出来たって言うのか?!
いや、それよりも、
「インドラプトル!?」
「そう、ラプトルだ。
インドミナス・レックスはその名の通り、ティラノサウルス・レックスをベースに造られたハイブリッド。
一方インドラプトルは、ヴェロキラプトルをベースとしている。
分かるか、この違いが。
インドミナスは所詮、客寄せパンダ。　ホスキンス共が多少の悪意を混ぜたとはいえ、その本質は魅せモノだ！　アトラクション用の玩具だ!!
だが、インドラプトルは違う!!」
立ち上がり、インドミナスに飛びかかってあっという間に全身から血を噴き出させるインドラプトルを指差し、高らかに宣言する。
「――そいつは最初から、軍事利用をする前提で造られたラプトル(ハンター)!!
より賢く！　より疾く!!　より残忍に!!!
殺戮兵器であれと造られた生物兵器!!
インドミナスとはスペックが違うのだよ、スペックが!!!」
「!!　ウソだろ!?」
劇中で圧倒的な存在として描かれたインドミナスが、目で追いきれ

ない程のスピードでズタボロにされていく。　お前は進○のリ○ァイ兵長か?!
　ニャル子たちが攻撃しようにも、同士討ちをするように誘導されて、ニャル子に蹴りを入れてしまうクー子という、普段なら絶対ありえない光景が見られる。

「ちょっと待て、生物兵器?
　お前の目的は、僕らの世界にジュラシックパークの偽物を創ることじゃなかったのか?」
「ああ、そのつもりさ。
　だが、貴様らニャル子や、未だ俺を狙う邪神を始め、俺の成功を妬んだ連中がやってくるだろうからな!!　事実その邪神のせいで俺の身体はボドボド!　つまり、そんなヤツらを殺すための存在だ!　まず手始めは――貴様らだ!!」
「グ……グギャ、ァァ……」
　インドミナスから力が抜け、倒れ込む。
「!?　おい、大丈夫なのか?!」
「まだ息はありますが、大分キツいかと!!」
　薄っすらと腹が上下するのを確認出来るけど、その動きは小さく、弱々しい。
　ニョグ太は自分で言った通り、戦えるような身体ではないから、インドラプトルに向き直る。
　一瞬、ニョグ太からアレの制御方を聞き出そうかと思った。　ていうか多分あのレーザーポインターなんだろうけど、相手はインドミナス以上に頭が回る。　騙されていて肝心なタイミングで効きませんでしたなんてオチが過ったから無視。
「ＧＩＳＹＡＡＡＡＡａａａａａａａａａａ――」
　伏したインドミナスに容赦なく爪を突き立てながら、こちらを伺うインドラプトル。
「……勝てそうか?」

「……少年。　答えを知っている質問をするのは酷いと思う」
「黙ってなさいクー子。
　3人がかりでなら、なんとか……」
　ズ、とインドラプトルの足が僅かにズレる。　途端にニャル子たちから、完全に余裕が消える。

「……真尋さんだけでも逃げてください」
「は？　お前らを置いていくわけないだろ」
「大変嬉しいのですが、流石に今回ばかりは洒落になりません」
「でも！」
「いいからっ!!」
　黒い甲冑に覆われたニャル子が掻き消え、インドラプトルに殴りかかるも紙一重で躱される。

「……焼き尽くす」
「ふっ!!」
　クー子の腕から噴き出た業火が鞭のようにしなって相手の動きを制限、その隙に黄衣の王モードのハス太とニャル子の蹴りが繰り出される。
　流石に避けきれなかったらしく、インドミナスの上から吹き飛ばされる、が。

「!?　これでも効かないだと!?」
「こうなったら、合体技です!!」

　ハス太が竜巻を作り出し、クー子の炎を纏ったニャル子が、再度突っ込む。
　よし、前にもデカイヤツを斃した、アレなら！

「ＧＩＩＪＹＡＡＡａａａ!!」
　真っ向から迎撃するつもりなのか、直線に疾り――――??!

「?!　しまっ、」
ギリギリでカクンと体勢を下げることでラリアットを躱し、そのまま走り抜ける。
その目は、
「少年!?!」
「八坂、?!!」
――はっきりと、僕を見据えていた。
「GAAAAAAAAAAAAAAA!!!」
「う――うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
――ブシュッッ!!
生暖かい液体が、辺りに飛び散った。

第9話

side真尋

……

……

……

……あれ？

確か僕は、インドラプトルに襲われて……なんで意識があるんだろう？

薄っすらと目を開けると、赤い壁が目に映る。

「……はい？」

つい出た間抜けな声に反応したのか、壁の一点が裂け、黄色い瞳が僕を見下ろす。

思わず悲鳴をあげそうになって、その瞳がインドミナスのだと分かる。

？　じゃあ、インドラプトルは何処に？

ブシュッっと血が何処からともなく降ってくる。

ふとそちらを見上げれば、インドミナスの首に噛み付くインドラプトルがいた。　喰いちぎるように首を左右に振ると、それにあわせて血が流れる。

「――ッ!?!?　お、おい！　大丈夫なのか?!?」

「グルルルルル」

目を細めると、首にインドラプトルをぶら下げたまま、ゆっくりと立ち上がり、

「ゴォアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

力強く咆哮する。

ショックを受けたのか、振り落とされたインドラプトルが距離を取り、互いに睨み合う。

って、あの怪我じゃ無茶だ！　なんとかしないと――

「無粋な真似はよせ、真尋」

シャラァと、赤く輝く、抜き身の刀が突きつけられる。

持ち主は、

「!!　アンタは、」

「よ、また会ったな」

例の、フードを被った邪神――！

「なんで止めるんだよ!?　このままじゃ、」

「その必要は無いと言っている。

インドミナスがインドラプトルに負けるとでも思っているのか？」

「当然だ!!　俺が造った、最強の恐竜だぞ!!」

お前は黙ってろよニョグ太!!

邪神も言いたいことがあるらしく、呆れたような雰囲気を漂わせて、

「……お前、馬鹿だろ。

インドミナスが勝つに決まっているだろう」
そう、断言した。
「なぜそう言える?!?」
「なぜ、か。
ならば逆に聞くが――
REX(レックス)とRAPTOR(ラプトル)。
それぞれラテン語で、『王者』と『略奪者』だ。
――王(レックス)が、泥棒(ラプトル)ごときに負けるとでも?」
そんな言葉を証明するように、辛うじて残っていた売店に、インドラプトルが叩きつけられた。
「……ばか、な、」
「当然の結果だ。　原作でも、ラプトルの名を冠する恐竜がレックスに勝てたことがあるか?」
「……無いな」
インドラプトルが両手の爪を無茶苦茶に振るが、牽制にすらならず、蹴り飛ばされる。
「グルァッ!!」
「ｋｕｓｏｍａｌａ!!」

「……あのＫＹを血祭りにあげるのは私がやっておくよ。　だからな、真尋。　お前らはいつも通りにすればいいんだ。　正直、今のお前らは見るに堪えん」
「……いつも、通り？」
「そう。　いつも通り」
　肩に手を置こうとして――身長的に背伸びしても届かず、二の腕を掴んで、インドミナスの方へ押しやる。
「ほら、お待ちかねだ」
　……いつも通り、か。

　……いつも通り、ね。
　じゃあまず。

「なあ、アンタ。　アンタにずっと言いたかった事があるんだ」
「ん？　私か？　なんだ？」
「お慈悲～」とか叫んでるニョグ太をサクッと亀甲縛りに処している邪神に向けて、
「お前さぁ、

　――キャラブレし過ぎなんだよ!!」
「△△□○！　ニョグ太シールド!!」
　スコーーン!!
「イギャァァァァァァァ!?!　目が、目がぁぁぁぁぁぁ?!?」
　投擲したフォークがニョグ太の両目に突き刺さり、ム○カに早変わりする。
「ホント、ずっとツッコミたかったんだよ。　シリアスの時しか出ないで、シリアスなセリフ吐くくせして、なんかあったらネタに走りや

がって!! 今のニョグ太シールドだってパタ○ンだし!! さっきの刀だって紅桜だし!! 1人用ポ○ドで潰れるし!!」
「ちょ、やさ、やめ、グボァーー!?!」
フォークの雨を浴びせたら、全部ニョグ太の急所で防がれた。
チッ!
「テメェもテメェだインドラプトルゥ!!」
「GGyAAAAAAAA?!?」
隔壁に叩きつけられているインドラプトルの鼻先にフォークを1本突き刺す。。
「お前さぁ、僕らの時間軸からみたら未来のネタなの! 分かる!? なのにポッとラスボスポジに収まりやがって!! しかもここはユニバ○サル時空だって何度も言ってるのにパワーインフレが起きるわ『クソマァ』言いながら蹴り飛ばされるわ岩盤浴始めるわ!! いつからここはDB時空になった!?! つかうp主の趣味丸出しじゃねえか!!」
「……USJでコラボしてるからよくnハイダマッテマス」
余計な事を言いかけた邪神をフォークをチラつかせる事で黙らせる。
「重要ポジみたいな感じで出てきたマルドゥーンさんは出番あれで終了だし!! なぜかニャル子は設定守るし!!」
「えっと……ごめんなさい??」
まだまだツッコミたい所はあるけど、取り敢えず、
「い・い・加・減・に・しろお前らぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
「GyAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA?!?!?!」
「」
手元に残っていたフォークを全弾インドラプトルにブチ込んでおいた。
フォークって恐竜にも通用するんだな。

……え？　インドミナスが巻き添えくらってる？　ちゃんと血で滑る分を計算して曲投げしたから、当たるわけないだろ。
「……物理法則仕事して、どうぞ」
「１番物理法則ガン無視してるお前らが言うな」
縛られて転がされてるニョグ太の腰からハイパーイースを取る。
「なあ、僕ら元の世界に帰りたいんだ。　これどう使うんだ？」
「こ、答えるとでｍ
「そっか。　なあそこの黒フード、お前自力で次元振動？起こせるのか？」
「黒フー……余裕で出来るぞ」
「じゃあお前は置いていくな」
頼む連れて行ってくれ!!　教える!!　教えるからぁ!!!　せめてそれ置いて行ってえぇぇぇ!!!」
ビッタンビッタン撥ねて自己主張する。　その姿はまさに、まな板の上の鯉。
「じゃ、頼むぞ」
「あいよー」
「スルーヤメテェェェェェェ!!!」
黒フードがパチンッと指を鳴らすと、空間がスキマのように裂ける。

――高度１０メートルくらいの所に。
「「「……はっ???」」」
「んじゃ！　サラダバー!!」
呆然としている間に、浮いた黒フードが裂け目に飛び込んで姿が見

えなくなり、すぐに裂け目が閉じる。

「……ウソだろオイ」

お、置いて行かれた?!!

「こうなったらニョグ太を拷ｍ……尋問して使い方を聞き出すしかないようですね」

「待て待て待て待て待て!!　帰れなくなったら困るのは俺も同じだ!!　素直に教えるからそのバールｗおるたなてぃぶ?!!?!!」

堅いもので固いものをブン殴る音が連続で聞こえる。

精神安定の為に後ろを向き

「……ＧＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲ」

「……オーマイガ」

ズゥゥゥゥゥンと、死神どころか地獄の釜そのものが歩き出したような地響きの主と目があう。

『振り返る』という動作をしたせいなのか、バッチリと僕を見据えるのは、『楽園の女王』。

――ティラノサウルス・レックス。
通称『レクシィ』が、そこにいた。

「……？　少年、どうし…………オウ」

「GOAAAAAAAAAAAAaaaaaAAAAAAAAAAaaaaaAAAAAAAAAAaaaaaAAAAAAAAAAaaaaaAAAAAaaaaaaaaaa!!!!!」

「「「ギイヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」」」!?!?!?
動かない物は見えないとかいう設定があったけど、これはムリ!?!!
インドミナスたちもボロボロでとても戦えそうにないし!!
回れ右！　全力で走れ――

「――楽しんでいるようでなにより。
じゃ、これで本当にお別れだ、真尋。
――目醒(おき)ろ、ねぼすけ」
ジャリィィィンと、何かを引き抜いたような音が響く。
紅い風が吹き荒れ――――

エピローグ

side真尋

『異世界であるジュラシック・ワールドに迷い込む』という、今までの中でもトップクラスのトンデモを体験した翌日。
疲れの残る身体を起こすと、

僕の首に噛り付くショタがいました。
うわっ、涎でべっとりしてるし。
「がじがじ。
……あ、おきた。　ごはんよこせー」

……どうして、こうなった。

――ティラノサウルスに襲われた直後。
サラダバーとかほざいて消えた黒フードがやったのか、向こう側が見えなくなるくらい紅い風が吹き荒れたと思ったら、すぐに暴風が収まり、
気がついたら、出発点であるルルイエに戻っていた。
……なぜか、インドラプトルごと。

ニョグ太を宇宙に打ち上げた後、インドミナスを例のドキドキノコ薬でロリ化させると、『せっかくですしやっちゃいましょうそうしましょう！』とインドラプトルにも薬を飲ませた。
フォーク片手にニャル子を〆ている間に効果がでたらしく、縮んで人間になった姿は、
『――!?!?　え、う、え、えっえ????』
ショタだった。

もう一度言おう。

ショタだった。

あそこ(パーク)の恐竜は全部メスじゃなかったのか？

しかも例の制御装置(レーザーポインター)、普通に効果があったようで、未だに照準された僕を襲う。　3頭身いくかいかないか位のチビッコだからダメージこそないけど。

……え？　ニャル子も狙われてただろって？

『フヒヒヒヒ』とか言って手をワキワキさせていたら、ドン引いていた。　おいそれでいいのか生物兵器。

閑話休題(そんなこんなで)。

僕らは、何故か更に1人増えた状態で帰ることになった。

その結果がこれだよ、全く。

――こいつらのことは分からないことの方が多い。

面倒ごとが、文字通り星の数ほどありそうな『次元振動』だって、まだ完全に片付いていない。

だけど、まあ、

「なんとかなんだろ」

「ところで、ニャル子は潜り込んでこなかったのか？」
「そこでれっくすがかじってる」
「ガリゴリ……あ、おはよう」
「」←血の海
「……ヤムチャしやがって」

特設キャラ説明
・　インドミナス・レックス
原作では開始以前に死亡していた、『ｉｆの存在』。　現在はロリ化して八坂家に居候。　姿は人間時のシャンタッ君に近いが、髪が真っ白。
かなり無邪気で、他人の言う事をコロッと信じてしまう。　でもインドラプトルとは仲があまり良くなく、よく喧嘩している。

パワー特化型で、ソファーを邪神(ひと)が座っているまま片手で持ち上げて投げつけたり、後のアト子絡みの話ではアトランティスのＵＳＪに封印されていた某デカイだけのヤツを殴って伏せさせたりする。
ちなみに真尋の長扱いは未だに直っていない。

・　インドラプトル
ご存知、『炎の王国』の看板恐竜。
ニョグ太がインドミナスと、健康診断の目的で保管されていたブルーの血から採取したＤＮＡを掛け合わせて造られた。　なおオスなのは原作設定。　現在はショタ化して八坂家に居候。　姿はインドミナスと瓜二つだが、髪が真っ黒。
我儘で、ツンデレ。　ついでに悪戯好き。　インドミナスとは仲が良くなくて、よく喧嘩する。
スピード特化型で、稀にツッコミで放たれた真尋のフォークを回避するほど。　雑魚を一瞬で殲滅したり、身体のデカイ相手の全身を切り裂くことで戦闘に貢献。　火力不足が現在の悩み。

・　ロバート・マルドゥーン
『ジュラシック・パーク』で登場したキャラ。　ショットガン、スパス１２を愛用。
経緯としては、パーク時はゲーム版と同じ『命辛々ラプトルを退け、後から来たもう一機のヘリで脱出』。　その後、当時の経験目当てでマスラニ社に雇われ、ジュラシック・ワールドに。
恐竜脱走時の対処係に任命されていて、真尋たちが合流した時は独自にインドミナスを追っていた。　よって、パッと見一般人に見える真尋たちを見て、『ジャイロスフィアで谷残った奴らが居たんだっけか（人数等は未把握だった）』と保護する。

・　黒フード／邪神
《情報は削除されました》